

〈国会事故調報告書〉

「事故対応の最前線となる中央制御室は、機能性と居住性が最も高い場所でなければならない。精神的、肉体的に過酷な環境の下、限られた人数の運転員が長時間にわたって中央制御室にとどまり、事故対応を行わなければならないためである。」

『国会事故調報告書』149 ページから抜粋

「国会による継続監視が必要な事項—免震重要棟の整備」

『国会事故調報告書』597 ページから抜粋

(福島)県原子力対策監を務める角山茂章会津大教育研究特別顧問は、日本原子力学会の会議で大熊町のオフサイトセンターが原発事故で機能しなかった事例を挙げ「免震重要棟がなかったら東日本は崩壊していたのではないかと」と緊急時の脆弱さを批判した。

2015年3月28日『福島民報』論説(原子力政策 この道でいいのか)から抜粋

国際原子力機関 (I A E A) レンティッホ事務総長

2016年2月24日共同通信インタビュー

「極度の自然災害に耐え、過酷事故であっても、緊急対応する適切な要員や設備を展開できる強固な拠点を建設することは重要だ。」「福島第一原発では免震重要棟が地震や津波で破壊されず、事故に対応する施設となった。事故から学んだ大きな教訓の一つだ。」

2016年2月26日『東京新聞』

福良昌敏・元福島第一原発ユニット所長

福島第一原発の事故当時、1、3、4号機を統括するユニット所長として吉田所長を補佐した東電の福良昌敏(元福島第一原発ユニット所長)が取材に応じた。

——地震発生時は、事務本館2階の執務机で仕事をしていた。長く強く揺れて天井の化粧板がぼろぼろ落ち、ほごりで真っ白になった。揺れが収まると、対策本部のある免震重要棟に移動した。しばらくして、電源が喪失して非常用発電機が回ったと報告があった。今まで外部電源が全部なくなることはなく大きな出来事だったが、電源が確保されていると、みんな比較的落ち着いていた。

——続いて津波が来た。今度は、非常用の電源が落ちたという報告が次々上がってきた。なぜ止まったか最初は分からなかった。外にいた当直員がびしょぬれで戻ってきたという連絡があり、津波が来たんだ。しかも海拔10階で、かなり大きい津波だと、そこで初めてわかった。

——金庫源を失った。警音が非常に大きかった。非常用発電機が全部止まったこともさることながら、バッテリーも一部の原子炉で全部喪失した。中央制御室は真っ暗で機

器のランプ表示が消え、原子炉圧力や水位の数字も見えないなどの報告が次々と来た。

——1号機のICの停止を現場の運転員は知っていたが、中央制御室内の当直長にすら伝わらなかった。しかも、免震重要棟には違う情報が伝わっていた。

(自分は免震重要棟にいて)推測になるが、当時は大勢がいて、照明や表示が突然消え、いろいろな確認をしていた。かなり騒がしく、誰が何を言っているか分からない状態だったので、確かにICは重要な設備なのでそこに注目すればよかったが、ほかにも重要な作業や設備はある。

——1号機の原子炉建屋で最初の水素爆発が起きた。音は聞こえなかったが、振動があった。余震の一つかと思ったが、けが人が出たという話があった。なんで爆発したのかわからなかったで驚いた。テレビの映像を見て、あせんとした。

——3号機では、代替注水ができる



原発事故発生当時の状況を語る福良昌敏(元福島第一原発ユニット所長)立地本部副部長。東京都千代田区、池水牧子撮影

集中立地「3基同時の対応は厳しかった」 海水注入「しくじったら努力が水の泡に」

ことを確かめてから、HPCIを止めるべきだったとの指摘がある。

——これも推測だが、圧力を下げるために開けるべき弁のランプ表示がつかい

ていて、ひねれば開くだろうと考えたの

ではない。当直が心配したのは、運転範囲

を超えた状態で動かしているHPCI

が壊れ、蒸気が噴き出したらとんでも

ないことになる。早く止めたいとい

うことがあったと思う。細かいところ

まで指示を仰いでいたら事象が進展し

てしまうので、当直の判断だ。

——複数の原子炉建屋が相次いで爆

発し、事故の収束作業が困難になっ

た。集中立地が影響したのでは。

——基しない原発なら、対応は柔た

った。3基同時に対応しないといけない

のはかなり厳しかった。

——3号機の爆発は大きく、現場の放射

線量はかなり上がった。それでも外に

出て作業をしないわけにいかない。全

面マスクに防護服、その上にビニール

の上着をかぶらないと汚染してしま

い。作業がしづらかった。

——格納容器の圧力を逃がすベント

がうまくいかなかったのは、

建屋の中は照明が落ちていたので屋

間でも暗い。ランプがついていないの

で、弁が開いたかの表示も見えない。

細かい指示や調整がまったくできな

かった。

——2号機はRCCが3日近くも

ち、時間的な余裕があったのに深刻な

状況に陥ってしまった。

現場の感覚は決してそうではない。

その間に1、3号機に対応が入ってい

る。3、4日目になると、みんなロボ

ットではないので休まないといけない

。

——2号機はベントも注水もでき

ず、非常に緊迫した。

注水のための消防車の燃料が切れた

時かベントができなかった時か、どち

らかかど覚えていないが、かなり深刻

で、吉田所長もぼろぼろと泣いていた。

事態を考えたのか。仮に3号機でしくじって海水注入が

遅れて、放射能の放出がものすごく重

になると、1、3号機の海水注入もで

きなくなる。消防車にも油をえられ

ない。今までの努力が水の泡になる。

それは強く感じた。

——その状況の中、4号機の建屋が

爆発。福島第二原発に約650人が一

時退避し、免震重要棟に約70人が残

った。そのときの棟内の様子は。

1、2、3号機とも曲がりなりにも

消防車で海水注入を継続できる状態に

なっていて、別の大きな出来事もな

かった。それまでがひどすぎたので、悲

惨な状態というよりも、静かになっ

て落ち着いた感じだった。

——免震重要棟に残るメンバーを決

めるのは、難しかったのでは。

誰を残して誰を退避させるのかは、

十いくつある班の班長に一任してい

た。私自身は決断をする場面に追い込

まられなかった。班長は苦労されたと思

う。

——福島では、いまも多くの方が避

難している。

申し訳ないの一言しかない。事故の

影響が今も残っているのは、事故が続

いていることと。決して終わって

いない。責任はしっかり果たしていか

ない。

——事故前の備えは十分だったの

か。

訓練一つとっても十分でなかった。

外部電源だけでなく、非常用発電機が

止まるベントもなかったが、5時間半

くらいはなんと、なぜか修理できました

というベントがあった。ある意味、脚

本を踏んだだけのお芝居に近い訓練を

やっていた。

——事故の教訓は、

やはり安全の向上にはゴールがない

ことと。これだと思つた瞬間

に、ひびいたことになる。いくら想像力

をかき立てて想定を考えても、想定外

2016年3月2日付『朝日新聞』

国会事故調の指摘

1～4号機の事故は、発電所周辺の放射線量を上昇させることで、近接する5、6号機に影響を及ぼし、さらに、福島第一原発から約12km離れた福島第二原発の復旧活動にも影響を与えた。 (『国会事故調報告書』201ページから抜粋)

どのような事象が、ユニット間及び近接する原子力発電所間での波及的影響を起し得るかは、個別の評価によって判定しなければならず、今後の詳細な検討が必要である。 (『国会事故調報告書』202ページから抜粋)

「安全目標」が、個々の原子炉を対象として設定される現在の考え方は、複数ユニットの原子力発電所や近接する複数の原子力発電所の周辺住民の立場からは不合理なものであるかもしれない。わが国においては、ある地点からの半径20km以内に2つの原子力発電所が存在する地域がいくつか存在しており、そこに居住する住民は、より高いリスクの下に置かれていることになるからである。

したがって、居住者の立場からリスクの公平性を考えるならば、このような多数のユニットが集中して設置されている原子力発電所に対しては、より保守的な安全目標が設定されるべきとする概念も検討されるべきである。

(『国会事故調報告書』202ページから抜粋)

現在、東通原発と東海第二原発を除く全ての原子力発電所が複数ユニットとして運転されているわが国においては、特にこの特徴に関する潜在的な問題点について十分に考察する必要がある。 (『国会事故調報告書』202ページから抜粋)

原子力規制委員長の定例会見での発言

「個々のプラントごとに、隣り合わせていてもきちっと対応できるようにということを審査していますので、大飯と高浜とあわせて考える
ということとはしておりません。」

「集中立地というのをどういうふうに見るか
というのは、確かに御指摘のように少し、検討
材料で、新しい炉を作るときにはそういうこ
とは十分に考慮されるべきかも知れないので
すが、今、そこにありますので、それをどうす
るかということとは勝手に規制委員会が決めら
れることではないですね。」

(2014年12月17日、原子力規制委員会委員長定例会見速記録から抜粋)